

ドイツの大学院生が主体となったシンポジウムに参加して

生命科学科 渋谷直人

最近ドイツで開かれた、博士課程大学院生が中心になって主催するシンポジウムに共同研究者ともども招かれるというちょっと珍しい経験をしたので、このページを借りてご紹介したい。本学の大学院教育や国際交流を考える上でもなんらかの参考になるのではないかと思われる。

発端は8月中旬にミュンスター大学の大学院生から来た1通のメールであった。この大学院生は博士後期課程の研究を始めるにあたっていろいろな文献を調べた結果、われわれの研究にもっとも興味を持ったこと、できれば10月中旬にミュンスター大学で開かれるシンポジウムに来て講演・ディスカッションをしてもらえないかというものであった。このシンポジウムはミュンスター大学がハイデラバード大学(インド)と共同で進めている大学院博士課程教育プログラム「分子・細胞糖鎖機能学 (International Graduate School of Molecular-Cellular Glycosciences: MCGS)」の一環として行われ、大学院生が中心となって企画し、世界の5つのグループを招待すること、それぞれのグループからは、PI(研究代表者)のほか、3人までのポスドク・大学院生を招待するとのことであった。

シンポジウム、とくに国際的なシンポジウムの場合、講演依頼は半年から1年以上前に行われるのが普通なのでちょっと戸惑ったが、大学院生が中心になって開かれるシンポジウムというのも経験したことがなく、また、これだけの数の研究者、院生を世界から呼び寄せる(全員分の旅費、滞在費を負担するとのことであった)ことがどうして可能なかにも興味をもったので参加することにした。われわれのグループからは、筆者のほか、シンポジウムの内容に合致する仕事をしており、英語でのディスカッションが可能なことを考慮して、共同研究員の新屋友規博士と筆者の研究室で博士課程修了後、ドイツ・チュービンゲン大学で博士研究員として研究中的の出崎能丈博士に参加してもらうことにした。

シンポジウムに呼ばれたのは、われわれのほか、ジョンズホプキンス大学(米国)、ウプサラ大学(スウェーデン)、コペンハーゲン大学(デンマーク)、オスロ大学(ノルウェー)の5グループ、14名の研究者、院生であった。主催者側からは、ミュンスター大学の7名のPIと幹事役を務めたポスドク、MCGSプログラムに所属する博士課程大学院生20名強が参加した。会期は3日間で、招待講演のグループにはそれぞれ75分間割り当てられ、自由に使ってよいとされた。われわれのグループでは筆者がキチン受容体に関する研究を中心に、植物免疫における糖鎖シグナルと受容体に関して40分ほど講演し、新屋博士からこの過程で開発した系統的な受容体解析の方法論について15分ほどの講演をもらった。他のグループからは、タンパク工学を利用した分子スイッチの開発、遺伝子ターゲティングと組み合わせたO-結合糖鎖のグライコミクス解析、プロテオグリカンの生合成制御と病態、アフリカの伝統医薬から得られる生物活性多糖の構造と機能といった多彩な発表があった。また、ホストであるミュンスター大学からは、それぞれのPIがグループの研究の総括的な話を30分ほど行い、個々の研究については大学院生がポスターで発表するという形式であった。ポスターセッションでも是非発表してほしいということだったので、新屋博士と出崎博士にはそれぞれの研究についてポスター発表をお願いした。全体を通じて印象に残ったのは、ディスカッションが大変活発で、とくに大学院生からの質問が目立ったことである。後にも述べるように、このシンポジウムは基本的に全て大学院生と事務局を担当したポスドクで企画したそうで、自分たちが招待したグループから徹底的に情報を収集し、また、できるだけ親密になりたいという意思が会議全体を通じて大変強く感じられた。研究交流に関しては、正式のシン

ポジウムに加えて、最終日の午後にそれぞれ関係する研究室・グループに分かれ、シンポジウムに参加できなかった学部学生を含むグループとのディスカッションを行った。筆者の場合は、これらの学生やスタッフのため講演をもう一度やるように依頼されたので、結局3日間で2度同じ講演をすることになった。ここでは講演の後、先方の研究の説明と可能な共同研究についての打ち合わせが行われた。

シンポジウムでの招待講演者の紹介や進行こそ PI が行ったものの、全体の企画、運営は大学院生と1名のポスドクで行われ、若手中心の企画ならではの試みが随所を感じられた（今回の企画の中心になった大学院生の多くが女性であったことも印象的だった）。会期は3日間と短かったが、2日間のシンポジウムに加えて、3日目（日曜日）の午前は市内のカフェを借り切って朝食・昼食を兼ねた食事をしながら交流を深める場を設け、さらに座る席もくじで決めてできるだけ多くの人が交流できるようにするという配慮もされていた（途中で席替え）。また、市内のピカソ美術館を見学した後、美術館の一角でディナーを兼ねてポスターセッションを開くといったユニークな試みも行われた。昼食・夕食も全員参加で、市内のツアー後、運河沿いのレストランで食事をしたり、中世ドイツの農村を再現した小ぶりのテーマパーク（生田緑地の日本民家園のようなところ）のツアーの後、古い民家を改造したレストランでバンドを入れて深夜までパーティーを開くなど、なかなか凝ったものであった。

MCGS のプログラムはドイツ学術振興会 DFG から財政的な支援を得ており（大変競争が激しい資金とのものであった）、糖鎖という分野にフォーカスし、部局横断的に作られていること（それぞれの PI はそれぞれの部局に属しているが、このプログラムではその上に新たな組織を作っている）、大学院生を国際的に募集し、またハイデラバード大学と提携することで海外経験を積みやすいようにしていることなどの特徴を持っている。また、プログラムの中心となっている Moerschbacher 教授の話では、これからの博士課程が大学教授を再生産するためといった従来型の発想ではなく、企業を含めた広い分野で活躍できる人材を生み出すことにあるという基本的な理念をもっているとのことであった。今回のシンポジウムはそうした教育の一環として、大学院生にさまざまな経験をつませるとともに、国際的な共同研究の展開、ネットワークづくりを目指したものとされているが、その目的は十分に達成されたのではないかと思われた。一方では、こうした経験を経て育ってくる人材と競えるだけの教育を日本の中でどう実現していくかを考えると、語学の問題を含めなかなか大変だと思わされた。会期中はホテルの送り迎えを含めほぼ完全に缶詰め状態だったため通常の学会に比べてやや疲れたが、なかなか得難い経験をしたと感じている。

（添付の写真は新屋博士が撮影したもの）









